

倭訓栞後編

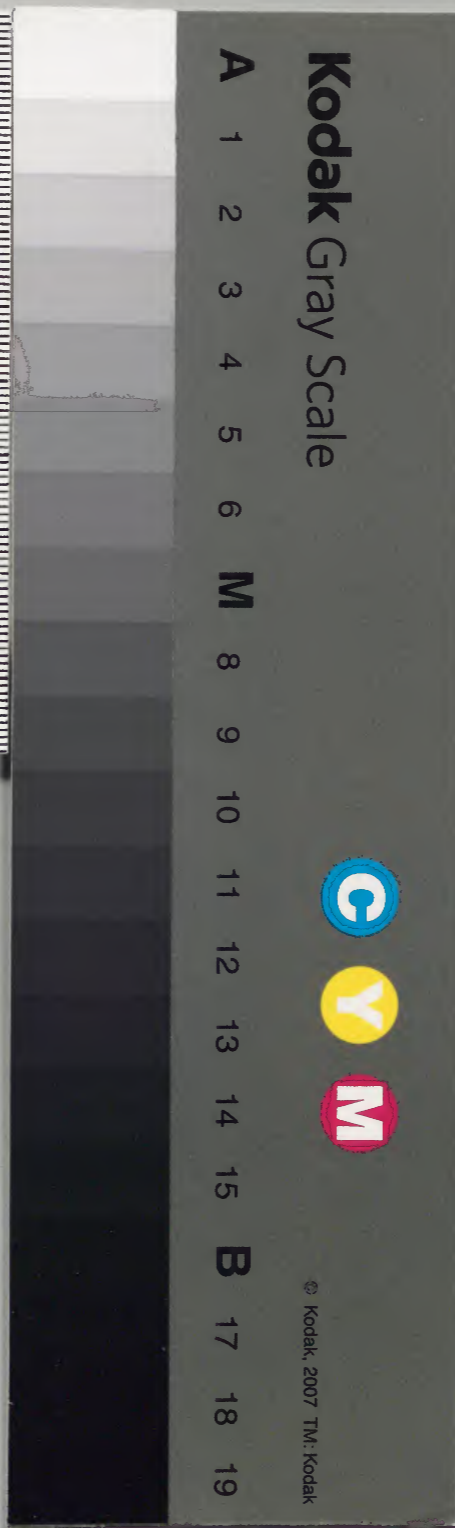
末美牟女宅之部

十六

			二一六五一號	和書門類
八二册	二架	八〇函		

庫文閣内				
三三函	二一六五一號	和書		
四架	八二册			

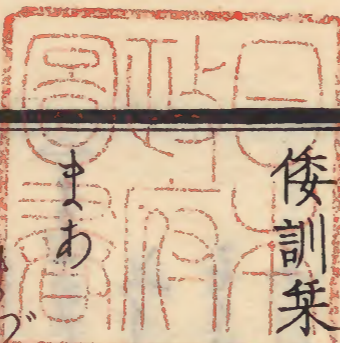
内閣文庫	
番號	和 21651
冊數	82 (80)
函號	263 10



倭訓集後編卷之十六

末の部

洞津 谷川士清纂



末の部  
俗語姑と譯さう又且と譯とくし末と殘と辭也  
まがら目と又まんともつ物とまめくとりと辭とまめくこの  
けりいほまの響きさるんぞ之○下総とて馬とまめくとり下  
野とまめくめりとり

まめく 新撰字鏡、顔とまめく眉間也と注せり

まめい 和名抄、鳥牛を訓さうまめきをいふ今とあつと

まめ

まめり 罷歸とまめり史漢とまめり軍行とまめり

まめり

まめき 鄭氏説、古人每匹作兩箇卷子とまめり今名と

まめき ちとにまめり織物類とまめり巻絹とまめり○巻軸とまめり又

軸の物ともなり○寒具よりみすだぬハ天寶遺事の荷拳也  
とらう

△まくれ 眩より目暗の義之○偶中とらうれあうりとも  
回義之卒死と訓じり

まぐさき 日本紀ハ蟻を訓じり蟻蟻之源語秘訣よりらうハ  
たくと義之しとらうれのゆりとれきの詞今を四國辺よりあり今  
ふさだより目塞の義又ゆりらうりとらうり糠蚊の義之○新撰字鏡ハ

ハ蟻と酒のよと訓じり○源氏物語よりみあれゆりてらうり  
たりとも秘訣よりみあれゆりてらうり虫のゆりてらうり

△まごのて 爪杖より麻姑手之麻姑ハ仙女の名其手如鳥爪と  
らう如意も同じ不求人ともなる○拳の形と造り積塊と推摩

らう物にらう或ハ木天蓼と用ひ或ハ接骨木と用ひ又水蠟樹と用  
ふ

まごびらり 江次第ハ孫廂とらうけり母屋ハ対しソミ名ある  
ぞ海人藻芥ハ清涼殿の孫庇とらうハ檜皮菅の庇の外ハ又

板庇とらうらう之檜皮菅ハ時雨の音とらうハ板庇とらうて  
ゆり多しとらうらうの為とらうり○又庇妻庇類聚雜要ハ

○小嶋のまらびらり鎌倉の右大将建久ハ始て上洛せりけ  
主上登の法をハ出御頼朝マまごびらりの名ハ小伺候のよう  
日記よりらうらう

△まらりのて 斧鉞とらう日本紀倭名抄より新撰字鏡ハ鉄  
とらうり斧小同ト又板斧とらう正刈の義とらうり神代の劔ハ蛇

之鹿正あり大葉刈あり

△まらら 猿とらうらうとらうらう一説ハ申とらうらうらう  
義ハ助語とらうり一本にまらることとらうらう猿子の義とらうり

一説ハ梵語とらうり名義集ハ摩斯叱此云彌猴とらうらう  
まらめ 交睫とらうらうらうらうらう



まろづけ 雲圖抄賭博の條に及ぶ的付と云けり  
まどこむらさきと云ふ 日本紀に真床覆衾と云ふ事あり

ハ玉座と称する事あり又追衾とも云ふ

古事記の哥にまねぐら尾行合と云ふ事あり新

撰字鏡に鴨又鳩を訓じり○兼俱説に鶴鴿と云ふ事あり

らと云ふ事あり字鏡に鴉を訓じり

五節の舞姫帳臺の試と云ふ事あり十一月丑の日ふあ

つて常寧殿に御出御と云ふ事あり御直衣に御指貫を着御と云ふ

らと云ふ事あり

鑛と云ふ事あり真生の義ありまろづけともいふ衆妙

集の哥にまろづけ鑛は山石まろづけの自然と指てり五金

ともいふ事あり金銀銅一種ありて吹かて三品とす錫鉛もい

雑と云ふ事あり唯其多きふ統て金山銀山銅山の名称ありの事○今

金山とてまろづけと云ふ事あり金銀と掘るる穴の名あり金鑛と云ふ事あり

源氏に上の女房まろづけとあるは前ハ元後ハ是

右と云ふ事あり上の女房ハ典侍掌侍等也

見の字と云ふ事あり間見ゆの義と云ふ事あり音現或ハ賢遍及の

時のよき也

蝮蛇と云ふ事あり真虫の義と云ふ事あり人を毒螫する事ありてり

ベ一狼と真神と云ふ事あり如○まろづけ草ハ天南星也○池鯉鮒

ハ長むと云ふ事あり其社より長むと云ふ事ありと防くの符と出たり○

黒焼の蠻名と云ふ事あり

莊子の注に孟浪亦音漫爛無所趣舍之謂也と

云ふ事あり

神樂哥に千歳あり本ハ千歳と云ふ事あり末ハ万歳と

云ふ事あり此より出たりと云ふ事あり一説に今正月ハ三河万歳と云ふ事あり素袍鳥

帽子と云ふ祝語と云ふ事あり者ハ大江定基より起ると云ふ事ありソハ万歳也

大夫每年東都（多）正月十日勤仕（と）其初尾州春日井郡長母寺の開山無任其詞（と）作（て）愛智郡内村の民の教（へ）其詞屋舎宮造の事（を）其朝家正月東庭の千壽翁（を）追（は）農業の（を）春駒（を）蚕業の（を）衣食住を重ん（じ）て辛の始（と）興を催（し）一（は）無住（は）尾張國山田の木（が）崎（に）隠（ま）て禪僧（と）と深意（あり）り（の）無住（は）尾張國山田の木（が）崎（に）隠（ま）て禪僧（と）ら（り）と（を）○文獻通考（一）万歳樂唐武后所造也當此時宮中養馬能入言又常稱万歳故為樂以象之（と）也

△まろく（と） 小玉の銀（と）豆板の義（を）明世説（し）為銀豆賜侍（と）と（は）天工開物（一）治銀為豆（と）○慶長六年の後大判小判（一）分判丁銀豆板等の制（は）改（め）つ（た）つ（た）

△まろら（と） 陽根（と）呼（ぶ）麻呂の轉音（と）や靈異記（一）閑寂（と）漢語抄（一）屎（は）破（り）前（一）云麻前良（と）前（一）字（は）衍文（と）や和名抄（一）屎（は）骨

也可為玉莖之義不見（と）又俗或（は）以開字為男陰（を）以開字為女陰（を）其說未詳（と）と（ん）と（ん）

△まろりや 日本紀の奇（と）私記（一）矢也（と）と（ん）

△まろら（と） 禮記の博飯（と）と（ん）字書（一）博（は）以手（を）圈物也（と）と（ん）○石坂（一）轉字（と）と（ん）反ぶ（と）

△まろら（と） 新撰字鏡（一）娑婆（と）と（ん）

△まろら（と） 綿（は）後世木綿（と）と（ん）對（し）○真綿（は）鍼（と）と（ん）孟郊（の）詩（一）日結（は）口頭交（は）肚裡生（は）荆棘（と）と（ん）○美綿（は）で頸（を）と（ん）俗諺（一）春道（は）述懷（と）言下暗生（は）消骨火（は）咲中（は）偷銳（は）刺（は）刀（と）と（ん）



交々々々間色のものなり○山の石間生ずる草花の形をこ  
り小勝まゝ一種あり又溝生ずる秋咲草色の小花之葉ハ細小  
ふもろし一説ハ醉魚草ありともなり

みそとる 鹿驪根也と云々味醬のそとるなり此草を覆へ

みそとる 著聞集ハ味醬水のそとる今ハ雜炊ハ砂石

みそとる 集ハ味醬のそとる今ハ雜炊ハ砂石

みそとる 和名抄ハ菘と云々又作菘衣懸のそとる源氏催馬樂

みそとる 日本紀ハ來字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 道之狹也と云々野のそとる類あり

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

みそとる 三千年来字行字遊字ふと俗訓ナリ古語之又進

とせかけくみらゆせにあらてへちとせとみまひるる西王母

種桃 三千年開花三千年結子と漢武故事ハんえううよと桃と

三千代草と云々事藏玉集ナリ也

みらとる 東鑑ハ駄馬の道草喰太平記ハ馬ハ道草かみてと

みらとる 俗語の意をなすべし

みらとる 孤と云々身無子の義あり親族と云々俗ハ身

みらとる 濁の者身にある者あどと云

みらとる 湊紙と云々宿紙の下品也堺より出

みらとる 源氏ハるる上巳の祓除と云

みらとる 聾と云々新撰字鏡ハ聾と云々山海經ハ龍聽

みらとる 以角不以耳と云々

みらとる 家語ハ忠言逆耳利於行と云々俗ハ忠言と

みらとる 金言と云々枕書ハ佛語と金言と称するハふらふべし

みらとる 土産と云々宮箆のそと土萱也伊勢參宮より出ると云

みらとる 土産と云々宮箆のそと土萱也伊勢參宮より出ると云

みらとる 土産と云々宮箆のそと土萱也伊勢參宮より出ると云

みらとる 土産と云々宮箆のそと土萱也伊勢參宮より出ると云

みらとる 土産と云々宮箆のそと土萱也伊勢參宮より出ると云



（一）土産の字宋史張齊賢傳より上儀ふくもくもく

（二）倭名抄より薤とらみら薤とこみらと訓より今ハ薤と

（三）新撰字鏡よりハ薤とらみらと薤とたみらと又

（四）萬葉集よりみらとらみらとハ薤の義ことと

（五）雞飯の變語也又雞飯あり法同

（六）海松よりハ布の類よりハ惣名之哥に多く見目ノ奇

（七）てらみらとのもてらみらと衣よりみらとてらみら也今みら茶とて

（八）油綠色也すみら茶藍みら茶ふとらら○山ハみらとてらみら

（九）松蘭ともとも類之春花とて蘭ハ似てらら○みら蘭ハ鷓鴣蘭也

（十）とらら

（十一）未練の音之徒然草より

（十二）みきん

（十三）

（十四）

（十五）

（十六）

（十七）

後編卷之廿六 年

辛の部

むいき

無意氣也とらら

△むいで

蜈蚣を訓ぜり對手の義也手の多とて相對へりハ名と

きり上総より下野の赤城山近江三上山ハ名也

はつとらら享保中洞津某の家よりハ三尺餘ありとらら○或人家

とありとらら造らんとて家内安全の札門よりハ取放らるるハ札

ハ破て釘のころとららハ一尺をうららら蜈蚣の身の正中とらら

てらら札ハ書たふ辛と考ふハ廿餘年前之とらら頭尾手足と初

がらら常の如くと醍醐隨筆にらら○ありとらら此虫ハ化せり奉

近世の書にらら○むいでらら紅花と着とらら

むうつき

新撰字鏡より蔞をより草の名

むうごい

讚岐の方言より无名異也形色零餘子と似らら

むうぞらん

小蔓艸也花赤

むうぞらん

鮫の一種形尤奇也大明一統志の大蜈蚣皮とらら



むぐら 律草と云ふ万葉集にも云ふやうに八重六倉など  
うけり和名抄にたると云ふと云ふ新撰字鏡にたて蔽葦と  
訓ざり一説にむぐらハ蓬子菜也りむぐらハ律草也といふ二  
種形状異なり

むくろ 蠹動の意に云ふ〇豊肥をむくろと云ふも云ふ  
むくのき 日本紀楷をむくろと云ふ新撰字鏡同楷ハ菜

楷也云ふハ菜實をむくろと云ふや倭名抄に掠をむくろと云ふ  
了字鏡に村杖積和札松をむくろと云ふハ俗に掠をよ

むくろと云ふハその実果品と云ふべし今のもくろのき  
をむくろと云ふハその木と云ふ語あるも云ふむく

ろのきハ梓榆也といふ又閩中記に加條其葉可用摩犀角象牙  
と云ふはハ是と云ふべしと云ふ吉釣藤美龍藤なども名けた

まばを云ふべしと云ふ〇めむくハ河間府志  
の厚朴也と云ふ〇俊頼朝臣ある人の奇をば云てむくの系

みくろと云ふハ和名抄にも膠漆具と云ふ  
むくのきと云ふハ或ハ楷葉樹也と云ふ〇西行談抄  
に掠をむくろと云ふと云ふに壹岐入道相宣  
非の代にむくろの木と云ふ  
かくしむろりーにたのむのつけるむろりー  
えのきと云ふハぬまらと云ふ

むくろ 掠鳥の音ひんむに似て群飛と鶉の類〇むく  
ろハ別種之小むくとも云ふ味より

むくげのめ 和名抄に糞と訓せり蠹毛犬の義今むくげのめ  
と云ふ説文に龐と云ふ

むくらんじ 木蘭地之直垂と云ふ  
むくろのき 倭名抄に木欒子と云ふ本草に欒華と

云ふ其子堪為敷珠者也と云ふむくろと云ふもむくろ  
の轉訛と云ふ今むくろと云ふ呼者ハ木患子と云ふけん



いそやとまや

俗語也まや反さふれしきりさりの義をうべ

むどぞれ

俗力かを加へて折るをよみ○むすも草にけり

韋に似て根と莖を淡紅也とらる

むせの小

靈異記に蒙然とよふかゆるべし

むさひ

無退とつけきと无体うろく

むちや

俗語也むさうり將ぶるをるべしむちやけむちや

くしちやとちやちどつ

むらだて

鞭楯とのけり奥の地名也

むらむまび

太刀くさる鞭結の義あるべし

むつご

蠶の蚕をゆでふまやどちの如くあるとらる

むつごら

陸奥の海より出吉利苔とらる

むつごら

肥前筑後の江に産む無鱗魚也黒色ゆて白

点けりふるぐの如く食用とらる

むとくまん

俗語也無得心の音也とらる

むふんちや

無人島也八丈島より極南の大多廻り十五里

江戸房州の辺より八南東にけり三百七十二里五町とらる

琉球ハ其正面よりけり檳榔の木より高さ二十尋とありんか

とらふ鳥はけりありんか八丈より東南に廻り三里程の島より八

丈より六七町とらるとり白き鳥より白鳥の如く八尺餘とらる

むねとま

悪心をよみ悪ハ畏悪也むんくむとんふ意也

むねやとら

点心の事とらる

むたう

史の禮書に礼者人道之極也然而不法礼者不足礼

謂之无礼之民注に方猶道也とらるん

むたうば

草木譜に鳳伸刺とらる

むたうの

和名抄に管実とらる

むたまら

馬指の義也

ひまわり

馬借の義今ハ音とめて呼ぶ○車借をけり

ひまわり

玉篇ノ杓ハ繫馬柱也ト云えり

ひまわり

馬形の障子思の俣の日記ノ云

ひまわり

騎とよみ又のふとよむ騎也

ひまわり

和名抄ノ馬蛭とよみ蛭の大あること云々○新

ひまわり

撰字鏡ノ白世と訓ぢり馬蒜の義也

ひまわり

蹄岑とよみ馬のさうらうたる路とよみ

ひまわり

首着とよみはくふふ似て花黄也一説ノ百脉

ひまわり

根也ともいふ蓮花とよみ

ひまわり

馬場殿とよみ拾芥抄ノ豊樂院ハ八省西尺

ひまわり

子宴會所謂之馬場殿と名花鳥ハハ殿屋とて左右の馬殿

ひまわり

くわつとんえ巴抄ノ賀茂の競馬と巖覽の所とよみ

ひまわり

无名異の音也石見國の銀山より出ふ

ひまわり

无名門也禁中にあり

ひまわり

无名門也禁中にあり

△ひめぢぢ

梅鉢の義花梅似て鉢のぶいり上りむり或る

△ひめぢぢ

梅鉢の義一莖一花形鉢の如し山に生じて白花なる小草之衣服の

△ひめぢぢ

紋ともかきありとよみ○縮若水の説く梅鉢の花とよみ

△ひめぢぢ

生也とよみ

△ひめぢぢ

賽珊瑚ありとよみ實の大あらぬ大むらむらと

△ひめぢぢ

よ又白花あらむり○みやうむめがきりり虎茨也○ほろむら

△ひめぢぢ

ぬきりり南藤也

△ひめぢぢ

俗語也胸のやとくしりりむらむら

△ひめぢぢ

無禮の音今ハぶいりり

△ひめぢぢ

藜菊の義之玉のむらむら

△ひめぢぢ

むらむら松とよみ○伊勢國度會郡むらむら村

△ひめぢぢ

あり

△ひめぢぢ

伊勢一志郡藤方の浦あり藻塩草に

△ひめぢぢ

むらむらの貝りり海の者居ハ波のむらむら花とよみ

△ひめぢぢ

あり

△ひめぢぢ

あり



*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

朱の部

出羽の銀山のこのハ皆此と畜ふ所と通ふに此石出

す

△めろの

蓑荷と訓と和名抄くめろと云ふり芳香の養ふ

ふべ一宇音ふけり俗に井と云ふがけりハ花と云ふが

のこころを葎ハ干て軍用の草鞋と云ふ一根を眼科くろく石と云

○藪めろがハ花めろがと云ふを伊豆縮砂と称せり山めろがハ

高良姜く子と紅豆蔻と名くろくろくろの草何れ○俗説ハ蓑

荷と多く食ハ愚あつしふと云ふハ東坡が志林ハ本草ハ生薑

多食損智と云ふくろくろ無性吾愚吾食薑多矣と戯れハ

アと訛りて傳へりあつしと云ふ○ろくろが縮ハ伊勢西宮の褥

と色む者今ハ白絹を用ふ

△めろの

倭名抄ハ牝鹿と云ふ今云ふろくろくろ○姓ハ

妻鹿と云ふ太平記ハ○鹿と云ふ鹿性淫ハ牝數牝謂





之聚塵

△ウツシイ

廟拜也 秩奠

△ウをり

日本紀万葉集のウをり多し 欲目の義

きく今と治目

△ウをぬく

新撰樂記 以謀抜入目

△ウとそざむ

側目とより 源氏

△ウがさ

偷針眼と名 治法

肩背に於て針

△ウのり

墨瓦臘尼加也 渾地五大洲

南極の下

△ウギ

花肆

△ウギ

眼木の義 小麩也

△ウギ

目巧と名 礼記

△ウギ

利の義

譯

めぎとだ

雌木雄木の義 形状

△めぎとだ

類と雄木

△めぎとだ

和名抄

△めぎとだ

薄苛

△めぎとだ

石薄

△めぎとだ

後太平記

△めぎとだ

貝の名

△めぎとだ

形

△めぎとだ

廻文

△めぎとだ

目刺

△めぎとだ

物

△めぎとだ

利

△めぎとだ

利

△めぎとだ

利



めおしむらび

河海共一なり目張の義あり

△めむら

河海共一なり目張の義あり又りこのともむら

ちとむらび丁班也と云り京はくむらびと又りきん志は南都り

てりたきき和泉とてむらび伊勢とてむらび尾張とてむらび伊

豫とてむらび肥前とてむらび田魚南部とてむらびと云り○沖むらびと

ゆらび似て肥きなり大さ尺餘くむらびあり

めむらび

目彈の義○新撰字鏡倭名抄く荒蔚と云り

即益母草也今薄荷と云り龍腦芫荷ハ雜蘇也○苜蓿の花

と云り稱きなり○羅勒と云りむらびと云り花肆ハ蘭香と云り漢

名也釋名醫子草ハめむらび也

△めまひ

眩暈と云り目舞の義也

△めみ

和布耳の義耳ハ似る也

△めん

麵子と云り今麵類と云り○三麵と云り饅頭むし

麦と云り也

△めめ

愚昧記ハ依御目許參進候と云り

△めやす

目易きハ心易ハと云り如

△めきん

俗ハ酪酏と云り音轉也

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

毛の部

毛いり

梅花の音綾の文いり

毛いり

藻魚の義也藻引く得ふ魚也鯨魚也いり胡

麻が〜と称とふと上品とん又黒が〜伊勢〜とふ〜

櫻州〜ハ赤魚とよぶ西國〜ソ〜とふ〜

毛いり

韃語〜馬とよぶ

毛いり

燃石也筑前黒崎〜石炭とよぶ

毛いり

菅家万葉〜燃草とよけり萌木〜とよぶ奇

毛いり

はらで萌草あ〜とよぶ

毛いり

俗語〜無義道の音あ〜とよぶ

毛いり

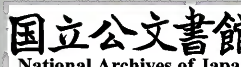
俗〜物と〜取〜とよぶ曲の義〜とよぶ〜或ハ竿と

毛いり

朝鮮牧司の〜也

毛いり

艾とよ燃草の義〜一説〜草の義又〜とよぶ



の略くとり

藻草の系藻州場をとり

木魚也粥魚とも禪家用予かとの

倭名抄木蘭と云く音一名木蓮今も云く木蓮

と云く花紫白の白花と云く色く僧尼令義解木紫

黄椽也と云く大山蓮花の玉蘭花也と云く

丹青樹と云く茂濃の系其葉のよく云く

や○瀨木園あり京も伊勢も云く花白して可見水木

犀也と云く○りせい木犀の音之桂の品之花の黄なるも金桂と

白きと銀桂と云く又丹桂と称すも同種琉球も木犀と云く

木患子也盛衰記興福寺の内の未申の隅に一

言生の明神と云くきの神と云く奉る社あり其前大き

なるもとけんも云く

関東の口語多くて云く

はと称する訛とも云く義訓之塩囊抄坂東も云く

或ハ猛者の音とも云く又云く

藻塩とのけり蒹草の類と云く海藻と

刈集めて云く潮と汲めて日小なりと云く積置

て更し潮と汲けて云く藻塩草とも云く

藻と焼て性と存し漏藍盛て潮水と汲て流さ

其水に金を入り煮て塩とも云く藻塩火とも藻塩焼と

と云く又云く木とも云く其木と云く一種あり○筆

と藻塩草と云く○花艸の品小なり草と云く

種あり○やくや藻の海の子ハ白詩の馬頭生角未為難山

上遣船又難ハ是難中難有一夕陽門外待入難の意ハ

日本紀百舌鳥と云く新撰字鏡と云く鷓と云く紀

名抄鷓と云く伯勞と云く形状悉く合す

委川集後編卷之十六

二

二

二

二

二

二

二

二

二

二

ア百舌ハ漢船渡来の物あり伯勞ハまさ別也○鳴かざりし  
もみかしくとくろ○和泉と名の莊ハ万代とよみ大鳥郡土師  
莊也

△とんごさぎ 鴉の居る草莖也とろ頭昭ハ鴉の草と替

也とろ清輔ハヤノト同トセウ万葉集ハかどの草と云

んびとん後のとろ尋常ト云とろとろえハ頭昭の説ト後

とろとろと反きとろとろとろハとろ

△とろま 藻玉の義海藻の実とろの藻ハひびきもと似とろ

ととろ萍実ト云とろ非とろとろ葉大ト根ト藻玉トとろと

ろハ蔓ト榎藤也ととろ暹羅國の土産トとろ○鯉の一種

の名にとよつろ砂の大とろとろト名也

△とろとろハ餅貝の義小團餅の如ク

とらつと 和名抄ト羊躑躅と訓とろ花莖ト粘着とろ

とろとろと名とろ今とろ紫とろ蓮花とろとろ此種類

とろ又とろとろとろ石ト生ふとろ也○女房の袋東に

とろ

△とろとろ 倭名抄ト梗と訓とろとろとろを略と本

草ト粘とろとろ縮とろ

△とろひのき 藻塩草ト云とろ今とろの木ト新撰字

鏡ト櫛字トとろ心得とろ粘糯トとろ貝原氏ト大功勞

業ト訓とろト大功勞ハ先醒齋筆記ト云とろ本草ト云とろ

纂要ト云とろ五加ト桐骨ト粘糯トとろト本草ト云とろ

ト冬青木の類也鉄とろ鹿とろ江戸とろ大坂とろとろ

鳥捕とろとろ又大カとろ味とろハ濱木蓮トとろ

△とろとろ 和名抄ト水雲トとろとろとろの畧とろト或ハ海蘊

ととろト共ト所出未詳トとろト一説ト藻トとろとろとろ

名ト海雲トととろト阿波鳴戸の産を賞す○とろとろとろ

泉州の産也又海雲トとろト○川とろとろ水綿ト○石とろとろ



とみづるは

圖繪宗彙、扇米風車と云う、又唐箕とい

とみづるは

唐僖宗の時于祐、得御溝紅葉題詩の

故事、太平廣記、又本事詩、顧况、事雲溪友

議、盧渥、北夢瑣言、李茵、玉溪編事、侯純、

事侍兒小名録、賈全、虛事、似、年中行夏の

流、その名、やま、紅、か、け、の、茎、の、ゆ

とみふい

大坂信也、あ、い、と、い、と、い

とみづき

西湖遊覽志、紅、出、也、と、い、と、い

とみ

とみ

俗、人、あ、合、て、各、物、と、出、事、と、い、と、い、催、合、の

義、あ、友、や、く、○、船、と、並、合、す、と、い、船、之、と、義、同、と、い、網、を

遣、手、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、

とやふ

人の多く集りて擾乱と云う、と、い、と、い、と、い、と、い、

やとる回

とま

茉莉の琉球音、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、

と、い、佛、經、に、朱、麗、花、と、い、白、茉莉、と、い、六月、雪、と、い、六月、細

白花、と、開、く、群、芳、譜、に、朱、茉莉、と、出、せ、千、辨、あり、單、辨、あり

○宋史、注、輦、國、傳、に、有、白、茉莉、散、糸、蛇、臍、佛、桑、麗、秋、青、黃、碧

娑、羅、瑤、蓮、蟬、紫、水、焦、元、類、と、い、と、い、注、輦、國、武、備、志、に、と、い、名、杖

桑、降、ふ

とら

母羅伽、と、い、た、る、蠻、國、の、名、也

とら

諸木、の、義、也、大、鏡、に、衆、樹、宰相、の、哥、出、せ、り

とら

江、祕、魚、之、諸、子、の、義、子、は、多、く、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、

近、江、木、曾、義、仲、の、墓、の、近、辺、又、坂、本、の、と、い、と、い、川、朽、木、此、魚、多、く、又

み、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、と、い、

○似、と、い、け、と、い、土、と、い、所、と、一、類、異、種、之、皆、湖、辺、の、名、也





